

100 海女 -素潜り漁の女性たち- (2022 年 2 月 24 日)

2022 年 1 月に発表された第 15 回日本国際漫画賞において、フランク・マンガン原作、セシル・ベク作の漫画「海女、女たちの息吹」が入賞しました。この作品の主人公は海女で、1960 年代の舳倉島（へぐらじま）が舞台となっています。この島は、石川県の能登半島から約 50 キロ北にあります。日本海の豊かな漁場に恵まれ、約 350 年前から海女が漁を行ってきたと考えられており、別名「海女の島」とも言われています。



Ama, le souffle des femmes de Franck Manguin et Cécile Becq © Sarbacane, 2020.

海女とは、素潜りでアワビやサザエなどの貝類や海藻などの漁を行う女性のことです。古くは、縄文時代や弥生時代の貝塚から、漁に使ったと考えられる道具や貝殻が発見されており、日本では 2,000 年以上前から海女漁が行われてきたと考えられています。現在でも素潜りの海女漁が行われているのは、日本と韓国だけだと言われています。



海女の仕事は重労働です。50 秒ほどの潜水の間に、水圧に負けずに 10 メートルほど潜り、ノミを使って岩に張り付く貝殻をはぎ取って浮上します。一時間で 20 から 30 回の潜水を行います。体力を必要とするだけでなく危険を伴う作業であり、漁獲物の減少もあって、全国の海女の数は減っています。1970 年代後半には 24 県に約 9000 人を数えましたが、

2010 年の調査では 18 県で約 2000 人まで減少しました。海女の高齢化が進み、後継者不足が問題となっています。

現在でも全国で最も多い約 750 人の海女が活躍しているのが、太平洋側にある三重県の鳥羽市と志摩市です。ここで、2016 年に伊勢志摩サミットが行われました。鳥羽や志摩では、海女の文化を後世に伝える活動が進められています。2017 年に「鳥羽・志摩の海女漁の技術」が、国の重要無形民俗文化財に指定されました。2009 年から、毎年全国から海女が集まる「全国海女サミット」が開催されています。海女による伝統的な漁法は、昔ながらの日常的な習慣を今に伝える貴重な文化遺産です。海女の文化が、後世に引き継がれることを願います。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

